

カナダ・ケロウナ・アート・ギャラリーにおける 美術教育プログラムの一例

福田 隆眞・中野 良寿

On the Art Education Program in Kelowna Art Gallery, Canada

FUKUDA Takamasa and NAKANO Yoshihisa

(Received January 11, 2011)

キーワード：カナダ、ケロウナ、美術館、美術教育、社会教育、美術連携活動

はじめに

本稿は美術館における社会連携の一環を明らかにするために、学校教育、社会教育のための美術教育プログラムの実態調査を、カナダのブリティッシュ・コロンビア州ケロウナ市における美術館（アート・ギャラリー）を対象として実施したものの報告である。本調査は2010年9月に実施し、調査経費は文部科学省科学研究費補助金「地域活性化のための美術連携事業の調査研究」に基づいている。¹⁾

上記の研究では、地方都市における美術による地域活性化のための提案を主に山口県・山口市をモデルとして行なってきた。また、2009年11月には北海道の釧路市において調査を行なった。²⁾ さらに地域における美術館、アートセンター、大学および小・中・高校などの教育機関、NPOなど民間の活動が相互に社会連携を行う海外でのケースとして調査した。今回の調査におけるケロウナ美術館の美術教育プログラムの例は、学校教育と美術館との美術連携活動として、美術館が地域の教員に美術の基礎から専門的知識および教科横断的な内容を美術の側から提供している点など興味深い実践内容になっている。

1. カナダ、ケロウナ市と美術館について

ケロウナ市はカナダ西部のブリティッシュ・コロンビア州オカナガン地方最大の町である。（図1）人口16万人（ケロウナ市ホームページより）であり、人口規模としては山口市に近い。ケロウナ市には文化地域が集中しており、町の中心街に、ケロウナ・コミュニティー劇場、オカナガン遺産博物館、オカナガン軍事博物館、ケロウナ図書館、ケロウナ・アクタースタジオ、ロータリー芸術センター、ケロウナ美術館、ブリティッシュ・コロンビア・オーチャード産業博物館、ブリティッシュ・コロンビア・ワイン博物館などの多くの文化施設が設置されている。市街地にも多くの屋外彫刻やモニュメント、歴史的遺産などが設置保存されており、文化政策を重視している市である。（図2-6）また、日本との関係においては愛知県の春日井市と姉妹都市提携を1981年から（春日井市

ホームページより) 結んでおり、街中に春日井ガーデンという日本庭園がある。春日井市から中学生の訪問団が企画される一方、ケロウナ市の学生の春日井市への訪問団の交流も行なわれていた。ケロウナ市内の彫刻家ロバート・ドゥ・リードRobert・Dow・Reidによるシンボリックなセイルの彫刻が春日井市にもあることから両市の交流が非常に活発であることが伺われる。

ケロウナ市の中心地であり文化推進地区に位置するケロウナ美術館は、正式にはKelowna Art Galleryであるが、機能的には日本におけるコマーシャルギャラリーとは異なり、美術館の機能をもった文化施設である。(図7, 8, 9) ケロウナ美術館はカナダの公的な美術館のひとつであり、拡張機能をもったこの施設は二つの教室と4つの展示室を保有している。ただ現在の展示スペース以上に拡張する計画があり、今後あらたな展示室の増築が計画されている。展示室では、地域、国内、国際的な内容をもった展示が企画・運営されている。調査時の展示は「The Okanagan Tree」という企画展示で、バンクーバー美術館のコレクションを主に使って編成された「Tree」という展覧会の巡回展にあたり、ケロウナ美術館のコレクションを加えた展示であった。オカナガン地域における第一次産業として果樹園が重要な産業であったことから様々な角度から木について言及した作品が展示されていた。

またケロウナ美術館では1976年から独自のパーマネント・コレクションを収集しており、オカナガン地方の芸術家の作品に焦点を絞って収集している。³⁾

また、幅広い視野と内容をもったパブリック・プログラムも活発に行なわれている。このパブリック・プログラムの中に、美術教育プログラムも含まれている。

2. 美術教育プログラムの例

ケロウナ美術館では、学校教育への支援活動を後述のように「スクール・ツアー・プログラム」として実施している。ケロウナ市には小学校25校、中学校が5校、高等学校が8校ある。これらの子どもたちのためのワークショップの予算として、5000カナダドルが計上されている。このワークショップは20年前から始められており、一年間にのべ約10000人の児童生徒がワークショップに参加している。

教員のための研修は月に1回実施されており、美術以外の教科とも連携してなされている。一回の講座に20人前後の教員が参加している。講座は学芸員が担当し、受講料は一回15カナダドルとなっている。教員対象のワークショップは昨年から実施されている。また、教員を対象とした鑑賞のワークショップも実施している。

以下に、教師教育の一部として実施されている教員向けの研修講座の具体例を述べる。この講座は教員の実践力、資質向上のためのもので、近年、視覚文化教育の一環として、美術館、教育委員会、学校の社会連携活動として世界的に実施されてきている。ここでは2010年4月3日に開催されたプログラムを紹介する。⁴⁾

この研修は地元の画家ジョイス・ホールによる実習と討論会からなっている。研修テーマは「教室での絵画」であり、研修内容は、絵画の多様な方法が授業でなされていることに気づき、絵画の媒体と技法の実験を試み、さらに他の教科において絵画が教材としてどのように役立っているかを討論するものである。

2-1 教科横断的な絵画の役割

①数学における絵画

・パターンを作ること：パターンは自然界と人工的世界の両方に存在している。パターンは美術の要素であると同時に数学の要素でもある。生徒はスポンジでできた形とテンペラでパターンを作り出すことができる。

・B. C. ビニングの貢献：カナダの画家のビニングの様式を基に、水平線、垂直線、曲線、自然の形を組み合わせ、自分自身の絵画を創作する。幾何学的な形体は数学の初歩的な内容である。

②科学における絵画

・花の部分：ゴッホのひまわりの絵のように花を大きく描いた作品は花の成長の記録でもあり科学の教科と関連している。

・抽象的な細胞の絵：細胞の解剖や機能の勉強の後で、植物か動物の細胞の抽象的な絵を描くことができる。

・ライフサイクルの絵：鮭や蝶々のような動物や昆虫のライフサイクルを壁画で表す。

③言語技術における絵画

・形容詞モンスター：視覚と言語の関係を形容詞を使って調査する。

・俳句のイラスト：俳句を絵やイラストで表現する。

④社会科における絵画

・天候探索：天候の学習との関連で絵画を活用する。絵画で天候を表すにはどのような色を使えばよいか、季節と関連する表現はどのようにするかなどを考える。

・歴史的壁画プロジェクト：歴史的な出来事を壁画に表す。時代や文化を限定してどのような平気画にするかを考える。

2-2 色彩の用語

色彩の用語解説としては以下のような色彩に関する基礎的な用語を簡略に説明している。これらは日本において中学校1, 2学年で学習する内容と同等である。

①類似色、②色相環、③補色、④中間色、⑤彩度、⑥無彩色、⑦パレット、⑧一次色、⑨二次色、⑩三次色、⑪色温度、⑫明度。

2-3 色彩理論の理解

ここでは色彩理論と絵画の理解をテンペラ画を通して進める。受講生は第一次色を混色して第二次色、第三次色を明色と濁色を作り出すのと同じようにして作る。受講生は実習を通して混色の語彙も習得する。

3. 研修の授業例

3-1 授業その1「混色」

・所要時間：約70分

・概要：この授業において、受講生は基礎的な色彩理論の考え方と用語について紹介される。受講生は第一次色（原色）を使って、色の取り扱いと混色について紹介される。そして第二次色、第三次色を作り出す。教師は混色を素早く行って見せ、受講生が色相環を作

る時間をとれるようにする。

・目的：受講生は以下のことを習得する。①第一次色、第二次色、第三次色の定義を知る。②陰や濁色を描くために第二次色、第三次色、補色を混ぜる。③自分自身の色を作り出すために混色の方法を使えるようにする。④画家が作品の中で雰囲気や効果を出すためにどのように色を使っているかを説明出来るようにする。

- ・教師の準備：カラーチャート、混色資料
- ・材料：赤、黄、青のテンペラかアクリル絵の具、筆、水入れ、パレット、混色資料
- ・文化的類例：いろいろな種類の色相環とカラーチャート、多様な作品例

3-2 授業その2「明色と暗色」

・所要時間：約70分

・概要：受講生は基礎的な色彩の考え方と用語を明色と暗色をすることで学ぶ。色相環の完成後、明色と暗色について学ぶ。明色は白を加えて明度を高くしたもので、暗色は黒を加えて明度を低くしたものである。

・目的：受講生は以下のことを習得する。①第一次色、第二次色、補色の定義を知る。②明色と暗色を作るために原色に白と黒を混ぜる。③画家が作品の中で雰囲気や効果を出すためにどのように色を使っているかを説明出来るようにする。

- ・教師の準備：明色と暗色のカラーチャート、混色の資料。
- ・材料：赤、黄、青の三原色と白と黒のテンペラかアクリル絵の具、筆、水入れ、パレット、混色資料。
- ・文化的類例：いろいろな種類の色相環とカラーチャート、多様な作品例

3-3 授業その3「テンペラ画の制作」

・所要時間：70分

・概要：この授業において受講生はテンペラ絵の具でテンペラ画を創作するために基礎的な色彩理論の考え方をを用いる。自分のイメージで材料を試し、混色を行う。この練習で受講生は色彩と絵の相互作用の方法を学ぶことができる。

・目的：以下のようなことを習得する。①第一次色、第二次色、補色の定義を知り、それらを絵に生かす。②明色と暗色を作るために原色に白と黒を混ぜる。③画家が作品の中で雰囲気や効果を出すためにどのように色を使っているかを説明出来るようにする。④元々のイメージから作品の制作を行う。

- ・教師の準備：①心象に基づいた簡単な構図の作品。②受講生が興味をもつ様々な画像。
- ・材料：3原色と白、黒のテンペラ絵の具、筆、水入れ、パレット、鉛筆、チョーク、厚紙
- ・文化的類例：①簡単な形と色で描いた様々な絵画作品。②現代美術の作品。③教師の作品あるいは生徒作品。

4. スクール・ツアー・プログラム

ケロウナ美術館はスクール・ツアー・プログラムとして学校教育の美術教育への支援活動を行っている。ここでは最新のプログラムである2010-2011年の内容を紹介する。（図

10、11) このプログラムは、「展覧会ツアー」、「実用的活動」、「教員研修」の3つからなっている。

ケロウナ美術館の展覧会ツアーのガイドは専任で知識のあるボランティアで行われている。彼らは情報提供と議論の手助けの訓練を受けている。展覧会ツアーは批評的思考を促進し、受講生が自分の制作に役立つように企画されている。

「実用的活動」では生徒と教員が展覧会に参加することで、その展覧会の特定の見方を習得するように企画されており、受講生は絵画、描画、版画、彫刻などの多様な表現を経験するように設定されている。

教員研修は前述のような内容で実施されている。

2010年秋－2011年春の具体的なプログラムは以下のようになっている。

①2010年10月12日：スクールツアー開始。

②2010年10月12日－11月26日：ケロウナ美術館の所蔵作品の研修。

③2010年11月29日－2011年2月17日：版画講習会。

④2011年2月21－25日：先住民の精神における芸術家の教育について。

⑤2011年2月28日－5月13日：ジョン・キシック展覧会「ナーバスな10年間」。

⑥2011年5月16日－6月10日：「アート・イン・アクション」（中学校、高等学校生徒のための美術活動）。

⑦2011年4月11－15日：「ケロウナ文化連携事業」（中学校、高等学校生徒のためのブリティッシュ・コロンビア州の芸術文化週間との連携事業）。

5. まとめと試案

カナダのブリティッシュ・コロンビア州においては、州都のバンクーバーでは視覚文化教育のための美術館、大学、アートギャラリー等の連携活動が活発に行われている。例えば、ブリティッシュ・コロンビア大学には人類学博物館があり、そこを中心とする教育連携活動がすでに実施されている。⁵⁾ これはブリティッシュ・コロンビア大学のカリキュラム研究学部の美術教育学者と人類学博物館、バンクーバー美術館が共同し、それらの持っている資源を活用して、教師の思考を複雑化し、広い文化的文脈の中で状況に応じた教育実践を行うものである。

こうした社会連携による美術教育は視覚文化の教育として広汎に行われてきている。その中心となっているのはアートセンターなども含む美術館と大学である。ケロウナにおいても美術館以外の文化センターで美術教育は実施されており、その一つとしてロータリー・アート・センターでは子供から大人までを対象とした各種の芸術の講座が開催されている。（図12、13）もちろん美術館においては前述のように教員対象の研修、一般市民のための講座、子供のための講座が実施されている。（図14、15）

以上のようなカナダ、ケロウナにおける社会連携としての美術連携活動の実態調査から、現実的に山口県や山口市での美術連携活動を試行するためのいくつかのヒントを以下に述べて、本稿のまとめとする。

美術館や大学が連携して美術教育、視覚文化教育を実施する事例は、現在では広範に見られる。山口県においても山口県立美術館が教員向け研修講座を定期的で開催したり、展覧会に即した実技講座を実施したりと、活性化している。また、秋吉国際芸術村のように

滞在型のアートセンターにおいても芸術家によるワークショップなどの研修講座が開催されている。そこには大学における教養教育、専門教育として学生の参加も見ることができ、このような社会教育として美術教育を美術連携活動とするために以下のような試案を述べる。

5-1 教育課程の検討

学校教育を対象とする場合において教育内容の基本である教育課程、学習指導要領の検討による連携が必要であると考えられる。教育課程は端的に言えば、児童生徒に何をどのように教育するかを考えることである。学習指導要領に示されている内容を、美術館の学芸員、学校の美術教師、大学の美術担当教員が内容検討をすることも必要である。美術教育は教科書、参考書によって表現と鑑賞の領域に関わる具体的テーマが記載されているが、実際の活動においては広範な主題の設定と完成作品の多様性が存在するので、学芸員と美術教員、場合によっては美術家、音楽家の参加による主題の検討も多様性や創造性をはぐくむ要因となり得る。

5-2 伝統的なものと現代的な美術の表現からの実践

ケロウナの事例では先住民族の美術を対象とした研究講座の実践が見られたが、こうした伝統的な美術に目を向けて美術教育を思考することも近年、活発になってきている。例えば、台湾の故宮博物院前院長の林曼麗によれば、故宮の所蔵品からの創造性育成の啓発に努めたワークショップの企画などを行い、「伝統からの創造性教育」による美術教育が進められている。こうした企画は山口県立美術館においても普及課の学芸員を中心にして実施され、歴史的作品の鑑賞についてのワークショップの開催、教員向けセミナーの開催、作品解説書の刊行など多岐にわたって活動を行っている。

このような伝統的な作品等からの美術連携事業としては、美術作品だけでなく伝統工芸などの作家、職人の協力と研究者の協力によって、美術館、大学、作家・職人の連携活動が可能となる。

さらに伝統からの創造性育成という観点から現代的な作品制作を考えると、現代美術やメディアアートの分野において美術連携が可能であろう。現代美術の発想や制作方法は学校教育の美術教育の表現方法を啓発するとともに、材料体験、教材研究といった教員研修にも有効であると考えられる。ここには美術家の参加協力によって美術連携活動がより充実した結果を得ることが可能である。

5-3 児童生徒美術作品の展覧会開催

ケロウナ美術館においては、年一回、地域の中学生高校生の生徒作品の展覧会を開催している。美術館と美術教員、教育委員会の協力によるものである。こうした展覧会は山口県ではすでに50年以上の歴史を有して実施している。山口県では学校美術展として開催している。これは学校教育の正規の授業で制作した幼児児童生徒の作品展であり、山口県教育委員会が主催し、山口県造形教育研究会が協力して実施している展覧会である。美術館での開催であるが、内容的には美術館との直接的な連携は特に行われていない。

今後の可能性としては考えられることは、教育委員会と美術館が共同企画したテーマのある児童生徒の作品展などがある。それは地域の特徴を主題とする作品展、あるいは国民

文化祭のような総合的な文化活動の一環として連携活動による児童生徒の作品展などである。

以上のようなことが、大学、美術館、教育委員会等の協力による美術連携活動の可能性であると考えられる。

注

- 1) 文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C） 中野良寿代表「地域活性化のための美術連携事業の調査研究」 課題番号22520138
- 2) 福田隆眞、中野良寿：「美術活動の連携について－北海道立釧路芸術館、釧路市立美術館の事例を基にした考察－」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第29号』， pp25-32， 2010.
- 3) Kelowna Art Gallery 公式サイト <http://www.kelownaartgallery.com/>
- 4) Kelowna Art Gallery, Tour Experience Learn Create, 2010
- 5) Baird Jill, “Avatars, Objects and New Relationship with Visual Culture Teaching: A University, Museum, Art Gallery Success Story”, InSEA World Congress Programme, 2008, p505

関連ウェブサイト

ケロウナ市公式サイト <http://www.kelowna.ca/cm/site3.aspx>

春日井市公式サイト <http://www.city.kasugai.lg.jp/index.html>

付記

本稿の作成にあたり、1 を中野、2， 3， 4 を福田が担当し、全体を福田、中野がまとめた。また、ケロウナ美術館での調査は2010年9月11、12日に実施し、情報及び資料は全て、美術館学芸員のバージェス氏（Miss Renee Burgess）から提供していただきました。感謝の意を表します。



図1 カナダ、ケロウナ市概観



図2 ケロウナ湖畔モニュメント



図3 ケロウナ湖畔モニュメント



図4 ケロウナ市街地モニュメント



図5 公園遊具



図6 公園遊具



図7 ケロウナ美術館正面



図8 ケロウナ美術館側面



図9 ケロウナ美術館 案内幕



図10 スクール・ツアー・プログラム 2010-2011



図11 スクール・ツアー・プログラム 2010-2011ワークショップ風景



図12 ロータリー・アート・センター 陶芸教室案内



図13 ロータリー・アート・センター 陶芸教室作品



図14 ワークショップの資料提示 (バージェス氏)



図15 ワークショップのための先住民民族 美術資料